プロレタリア通信 No13 1968 7.30

全学連第一九回大会の指導をめぐる 同盟の政治組織論的総括

共産主義者同盟政治局

一 はじめに

あらゆる意味において、第一九回全学連大会はわが同盟の政治組織的命運をかけた斗争であった。問題はたしかに学生戦線の分野に限定された、そして大衆的斗争組織の党派問題としてあったが、そこにおいておいて問われるところの問題は七〇年階級斗争への革命的階級と革命的政党の所在をめぐり、かゝる一切の問題への現実的解決（まさしく原理的解決ではなくて）としてあった。

このことはその結果においては不可避的にかゝる現実を担うべきわれわれの政治的、組織的実体をあますところなく暴露して等閑が進行せざるを得なかったということであった。しかし問題の本質的意味は七〇年の階級的激動における革命的任務が端緒的に問われ、それにこたえずして挫折するか、それを回避して政治的小局面に党派的固着をするか、乃至は、さらに大規模な前進を計画しうるか、の途が問われたし、また問われつゝある、ということである。われわれの党派的命運が、かゝるかたちで問われたことにたいし、われわれはいかに対応しようとし、対応し、かつ対応しえ、いかにその対応を革命的昂揚期の現在において展望的に準備しうるか、ということ、を主要に問題にしなければならない。かゝる点において、われわれは七回大会以降の同盟活動の全体を総括することによってこの問題の提起するものにこたえうるものであるが、今回は、かゝる提起の方法と前提について政治局は自己批判的に総括を提示するとともに、党建設にむけての全同盟の真剣な討議を期待する。

二、事態の経過と諸党派

七月一八日の都学連大会において発生した部分的暴力事件は、全学連大会第一日から全面化し、大会の主要な基調を指導するにいたった。

都学連大会の組織に結集力を発揮しえず（まさに問題はこのようなかたちであらわれていたのであったが）社青同解放派、ML派、国際主義派の結集力に圧倒された社学同は緊急に体制をたて、第一日大会会場（中大講堂）に臨んだ。

大会会場において、都学連大会から連続したゲバルト事件が発生し、一旦社学同は社青同解放派を大会会場から追いだし占拠した。大会会場から追放された社青同と別個に結集したML派は近くの中大学館を急襲し、これを占拠するという行為にでた。

これまでの経過は自然発生的な動向がそのまゝ固定化し、そしてこのこの対峙関係がそのまゝ党派関係を固定化させることになった。とくにこの間のゲバルト問題が「武器」をもったものとしてあり、そのために党派関係は政治的論理で強化させるという悪化の一途をたどった。

そしてこの事態にたいして政治局は、㋑青解派、ML派の襲撃に備えて大会会場の防衛装置を強化する。という措置をもって臨むことにした。その基本政策は、㋑大会第一日におけるゲバルト事件は、都学連大会よりの延長事件であり、党派関係にあらたな事態を提起しようとするものではないという態度の確認、㋺このうえにたって、反帝全学連の建設を断固としてやりぬく。㋩諸派に対してかゝる観点からの意志統一をよびかけ、青解派よりたたされている「社学同の自己批判要求」なるものにこたえず、都学連大会よりひきつづいている事件を最低、不問に附すというかたちで処理する、ということであった。

この上にたって、諸派上層部との交渉を同時におこなった。結果、まず社青同国際主義派との間において、㋑反帝全学連の建設、㋺ゲバルト事件は社学同青解派、ML派間の問題であり、国際派は関係しない、との了解をもった。ML派との交渉において、㋑反帝全学連の建設、㋺事件については相互にとりあげないとの了解をもった。そして青解派との交渉においては、㋑反帝全学連の建設、㋺都学連事件については都学連大会実行委員長の自己批判があり、青解派としてはこれによって解決すべきである、㋩

大会第一日目の事件は社学同の責任であり、社学同の自己批判を求める旨の要求があり、我々は第三項(八)については、学連書記局会談において大会開催の意志統一をおこない、事件による混乱の遺憾表明をおこなうことによって解決すべきであるとの要求を対置し、政治局の意志統一をもって再度かゝる提案をおこなった。

明らかに諸派上層部との交渉において、反帝全学連の建設、そのための相互自己批判という点における基本的一致が存在した。しかしこの一致が実際的問題の解決、武装解除による大会の開催という事態になりえなかったのは諸派内部における反帝全学連建設についての不一致が力の論理を媒介にして顕在化し、かつその結果として党派的解決が前面化したことによるものである。

社学同部隊においても、この点の基本的特徴は存在した。武装解除―大会開催を実現しても、ゲバルト問題は不断に発生し、この力の均衡のもとでの事件は、たちまちに大会は流会になる、従って党派的勝利なしの大会開催は無意味であるという観点から単独大会を主張し、あるいは力による党派的勝利を主張する傾向をもつことになり、この傾向は第三日にいたる諸事件の連続を媒介しつゝ全体の基調となりつゝあった。

第一日目のかゝる観点を基調を克服しえず我々は「大会防衛」「ゲバルト鎮圧」等といった、組織上層部を動員しての大会管理権をもって諸派を説得することになり、そのかぎりで反帝全学連を諸戦術で防衛しようとする枠を出ることができなかった。社学同部隊は大会を第二日目、午後一二時から明大記念館で開くことを意志一致し、青解派、ML派等がひきあげた中大学館にはいった。

大会第二日。しかし中大学館を占拠していた青解派、ML派は学館の徹底的破壊、金銭、物品等の掠奪行為を全面的におこなっており、その惨状は帝国主義的掠奪行為そのものであった。

だが第二日の事態の基本的特徴は諸派の内部動揺―解体過程の開始である。

諸派上層部による交渉は継続され、具体的には相互自己批判(都学連大会実行委、全学連大会実行委員長の遺憾表明)は現象的には文章字句上の問題をもってゆきづまり、政治的決断がのこされることになった。

他方、青解派、ML派は明大学館に移り、また明大記念館は大学側の禁止によって大会会場として使用しえず、我々は中大学館に大会会場を設定することにした。

社学同部隊は最終的にの時20分をもって交渉の区切りとし、大会開催にうつる決意をかためた。しかし青解派はさきの上層部の意志が下部に徹底せず、主戦派=早大支部、和解派=東大支部・地方支部に分解し、主戦派が多数派でありかつゲバルト戦力でもある関係上、主戦派のヘゲモニーが青解指導部をうきあがらせ、これにML派が二・三位連合として従属する位置をもった。こゝでもしかし、反帝全学連の位置と指導の内実としての戦略的問題の不一致が単に反ブント連合として結実し、反帝全学連をブント粉砕の党派的対決の場としくいかに有利に事態を進ませるかの観点のみが全体を指導した。われわれが予定した大会の最終日の時間的切迫によって、結果的にはこれら諸派の時間的ひきのばしを許すことができず、われわれは社学同のみによっても、学連大会を開会し、それによってさらに諸派の決意をせまる方針をかためた。

大会開催に際してわれわれは、国際主義派に対して最終的招請をした。国際主義派としては、反帝全学連は破産したものとみとめ、その上にたってあらたな全学連へ(「社会主義全学連」)を建設すべきである。従って今度の一九回大会は準備大会としておこなうべきであり、この点から、今大会には傍聴として参加する、との中間的立場をもっていたが、次におこった衝突事件にまきぞえされて蒸発してしまった。

大会前、社学同部隊が展開したデモンストレーションに驚ガクした青解派、ML派はたちまち結束し、中大学館に武装しておしかけ社学同部隊の防衛隊と学館前で攻防し、かけつけた機動隊によって背後を襲われて、四散した。この事件は、社学同部隊にとっても、また青解ML連合にとっても奇妙な敗北としてうけとられた。

とくに社学同部隊においては、この事件は「単独全学連」への決定的契機としてうけとられた。そして「防衛体制」の諸整備、軍事潮流的体制の確立が大会開催問題の前提として提起され、即ち再決戦による「勝利」の獲得→党派的勝利、それに乗じての

大会の開催、という論理が全体を支配することとなった。

大会第三日。だが戦線は離散した。打撃をうけた青解、ML派はたてこもり、事態の進展はなかった。

従ってふたたび問題は根源的に提起されざるを得ない。即ちわれわれがかちとろうとしている「反帝全学連」とはその、意味においてなにを追求しようとし、いかなる事態をむかえているのか、という問題であった。

第三日目の当初、P・B会議（拡大）はかゝる問題に関して討議し、反帝全学連は、青解派、ML派、国際主義派の参加がない結果として「単独」という現象的形態をとるものであるが、このことは「党派全学連」そのものへの転換を意味するものではないこと、したがって、ASPAC斗争、8/3集会における統一戦線の形態を維持し、前進せしめるべきこと、を確認した。まさにこの点から考えるべきことは、軍事的訓練とは党派的勝利の保障のためにのみ存在しうるものであり、かゝる党派的勝利とは、大会開催とその成功という階級的成果に従属しつゝ、これを保証しうるものとしてあること、まさにわれわれの党派的命運とは従ってかゝる階級的成果と展望を具体的なものとしうるか否かというところにかけられたものであった。

従ってかゝる意志統一のうえにたち、われわれの基本方針を確認するならば、問題となるのは規定路線の堅持であり、その発展的再確認の上に大会の即時開催をいかにかちとるかということであった。あたかも青解＝ML連合側より、①相互に第四回臨時大会を開催する。②役員人事は社学同側で委員長を選出し、青解＝ML連合側において副委員長、書記長を選出したい。③この上にたって早急に合同大会を開いて統一する。との申し入れがなされたが、これは去はや問題になりうる提案ではなかった。事態自身がかゝる提案をのりこえて前進した。青解派の内部分裂、ML派の連合よりの離脱に対して積極的な解決、ひとつの階級的前進を保証しうる提案をそれは意味したのではなくて、単にそのための党派的弥縫策を意味するものにすぎない。

もしわれわれがかゝる党派主義に拘束されるとするならば、われわれ自身の党派性そのものが階級的意義を喪失し、統一戦線はたゞちに党派の官僚的野

合の沼地になったであろう。われわれが自ら離れた党派的交渉というせまいブルジョア的政治を通してのみ獲得物は、よりひろい革命的統一戦線への足がゝりであり、その大衆的革命的部分の党派的―政治的覚醒をより大規模にかつ急速に準備するためにのみ戦線を全階級のなかに與ふかく建設することでなければならない。われわれは党の前線基地を建設することにとどまらず、かゝる前線基地が大衆を獲得し、党派の頭ごしに大衆をとらえるための政治的戦線を、全国的にはりめぐらせねばならない。それによって大衆の共感を獲得し、階級的形成を前進せしめる媒介は、現局面の階級情勢においては、大衆自体の政治的思想をひきだし、政治的行為を共有し、その意義を党派的理解として確立する大衆自身の組織である。反帝全学連は日本階級斗争の現代的伝統に立脚するところの、かゝる組織的意義をもち、まさにかゝる組織的内容こそ反帝統一戦線にほかならなかった。他党派解体とは、かゝる過程において われわれの大衆獲得―政治的な能力の変革性において、他党派を基本的には党派的固着化させ、ますます拡大する階級的な団結のなかで政治的能力を喪失せしめるという逆説的形成を最も鋭く革命的・前衛的な諸形態に導くための系統的活動である。本年六・一五を通じてわれわれが全国で困難な条件のもとで独自集会をかちとったことは、かゝる意味においてであり、一部の党派から評価されたセクト主義なる意味においてそれは全くあり得ないものとしてあった。

日本階級斗争はその国際的条件と現代的革命の条件からして労働者階級内部にたえず分裂を準備し、それ故党派的固着化を現前化せしめつゝ前進してきたし、まさにかゝる階級的条件こそ革命的動揺の基盤である。また反革命を同様の基盤に立脚するものであることはいうまでもないのであるが、反革命それ自体それ自体も日本では革命的形態をもってあらわれざるをえないという根本的な性格をもっているために、日本反革命政治の本質を党派的形態・党派斗争を前提とせざるを得ないものとしてある。これに勝利しえないところの反革命は反革命として存続することはできない。即ち単なる抑圧政策の連続展

開になっては当面の日本階級情勢は安定していないところの要因をもち、日本帝国主義軍隊自体もかかる点で反革命にとってはむしろ戦略的意義においてとらえられている。党派の時代とはまさに「あらゆる階級が政治過程に登場する」（マルクス）激動の前夜であること、それはかりでなく、革命的多にとって大衆の獲得（を高めうる）こそが決定的条件となる時代であるということ、まさにその革命戦略的意義（路線と統一のさしせまった問題）であるとの現実化、現実の革命的運動の時代であると考えなければならない。

以上を前提とした場合、学生戦線における反帝学生連建設は、わが同盟の革命的任務として回避しえないところの問題であるはかりでなく、同時にその任務を階級的試練にかけ、かかる試練に革命的に耐えうるか否かの問題、七回大会路線に基く同盟の政治組織路線の階級的展開力を問うものとしてあった。われわれは党と統一戦線のかかる観点をもって、大会前催をPB／学生組織委／社学同全国委／支部代表／全同盟員による意志統一と指導をもって決意し、午后十一時すぎ全学連第十九回大会を開会した。大会人事その他組織については一切以前諸派を加えた学連書記局会議で取りきめられていた決定を尊重し他派の脱落、不参加に顧慮することなく従来の方針に従った。（8ページへ）

（10ページより）いこと、その方向を与え導く組織的媒介こそ、本質的に向われたものであり、かゝるかたちでの反帝統一戦線の対応が向われたのであった。

党派斗争のかゝる戦略的課題が実行に移されぬまゝに、党派斗争の究極戦術＝ゲバルトによる解決がこれに代ったことは、われわれの革命的政治をますます後退させる印象を与えつゝある。われわれは党派斗争におけるゲバルトを否定するものではないし、否定してはならない。だが党派斗争におけるゲバルト戦は前衛戦であり、最高の規律をもってのみ有効に斗われるものである。党派斗争における攻撃的防衛斗争とはかゝる統一戦線の戦略的展開による他派の指導、そこにおける我々の基本的路線の貫徹、さらにこれの統体を利用しての党派の見ごしに大衆の結集を大規模に準備することでなければならない。かゝる点から考えるとき、党派斗争におけるゲバルトの階級的意義はさきのように限定され、まさにそのかぎりでわれわれは革命的政治を前面におしたてゲバルト力をその下に準備しなければならないのである。（11ページへ）

組織体制の総括に優越しうるものとして問題を

三、問題の所在

全学連大会開催にいたる指導の混乱は直接的には反帝全学連建設の階級的意義についての政治的意志一致がかちとられていないまゝにかゝる問題に自然発生的に対処したことによってひきおこされたものであった。

この基底にあった問題は第一にわれわれの七回大会政治路線を基軸に、反帝諸党派を政治的原則において指導しえぬ限界である。この間、二中委、三中委を通して政治的基軸の設定を系統的に展開しえなかった結果としても、かゝる限界が再生産された。そして第二に組織的指導体制が崩壊し、政治的対応不在のまゝに党派的自然性（発生性）が全体を貫く基調として支配的となったことである。だがこの二つの問題は相対的個別の問題ではありながら、深く関連していたわれわれは、単に路線だけを路線総括に還元することはできない。それはまさに政治方針のひとり歩きを逆に是認する政治方針主義に陥ちいるであろう。そしてまた単なる組織問題として問題の所在を　明示することもできないであろう。全体を

[illegible]主義は限定的な政治意志の不在のうちに自己展開したのであった。

とするならば問題の所在は政治組織論的総括としてはっきりとされねばならない。われわれの斗争がきりひらいた局面と問題の階級的意義を明らかにし、まさにその次元において路線と組織を実践し、前進を準備することである。これによってわれわれは路線上の清算主義を克服し、政治組織的飛躍を革命の時点にいたる連続的展開過程に位置づけて獲得することができるのである。

前提的に確認するべき問題とは、わが同盟が七回大会以降展開してきた諸活動のあらたな段階が開始されていることである。

。簡潔に要約すれば、かつてはわが同盟は日共と国際的スターリン主義党に対し世界革命・暴力革命をかゝげた別個の党派として成立し、かゝる党派の戦略的整備を過渡期世界の基本的情勢を媒介にしつゝかちとった。七回大会はまさにかゝるものとしてある。だがこの戦略路線がさらに全世界的階級情勢と七〇年安保を媒介にし、一党

派運動として完結するものでなく、大規模な大衆的運動を指導するものとして問われる段階を迎えた、ということである。「三派全学連」は基本的には党派的運動の算術的結合の環であり、その限りで各党派は各党派運動をもって（我々は社学同を組織して）対応すれば事が足りた。中核全学連はその純化であり、学生運動史上、27中委―17回大会路線への逆転として反動的である。反帝全学連は統一戦線全学連運動を形態上追求し、その内在的追求の計画的準備を欠落されざるを得なかったことによって、青解・ML諸派の脱落を防止しえなかった。

わが同盟は政治組織論的にかゝるあらたな次元の事態に対し指ド的に対応しえなかったところの弱点を点検するにあたり、右の前提を確認しなければならない。それは問題の所在と性格が一般的路線の修正と　組織弱点の検討にあるのではなく、戦略が全くあらたな事態に対して発展的なかたちにおいて政治組織論的に提起されねばならないというところにある。換言すれば、われわれの綱領的観点と戦略論が階級級的戦線の拡大を包括し、それへの計画的準備として提起されねばならない、というところにある。

現象的、方針的にいえばかゝる計画的諸準備は提示されていなかったとはいえぬ。われわれは三中委において、ASPAC、国際反戦集会等の斗争方針と共に全国的な基地斗争を提示し、日帝総路対決斗争との関連における意義にもふれていた。しかし問題は明らかに斗争課題にとどまらず、二中委以后の斗争路線との関連において「総括」即ち全同盟が迎えている階級的諸情勢と同盟の諸任務の性格を確定することであり、かゝる点における全同盟の意志統一を欠落させることが学連大会を舞台にした政治指導を確定しえなかった媒介的原因である。

それはいかなる意味においてであるか。われわれは四～七月斗争を日帝総路線対決斗争が個別斗争と区別された中央斗争（対权力中枢斗争）であるかのごとき把握があり、「戦線」においては、中核派の局地激発主義への批判としてかゝる傾向における把握を残すようなあいまいさがあった。われわれは成田王子斗争に対して沖縄斗争において中央斗争を対置して主張したのは、成田・王子斗争の否定においてではなく、まさに沖縄斗争という政治的色彩性＝

戦略的意義を日帝軍事力中枢への斗争において最も鮮明に暴露するという政治的優位においてであった。

大くて問題さいさつづく基地斗争、ベトナム反戦斗争をまさにかゝる成果の上にたち日帝政治委員会の侵略反革命政策との関連において暴露し、斗いの意識性を七〇年階級斗争における日帝打倒へとひきつぎ、一般的反戦意識をもかゝる方向へまきこむ任務を確認しなければならなかった。かゝる目的をもつ任務の形態は、まさに反帝統一戦線としてその場合をもつものであった。そしてかゝる形態を実現するために、われわれの任務の諸性格は一つには統一戦線戦術としての他党派解体＝党派斗争戦略を確定しなければならなかったのである。

党派斗争戦略とは、他党派に対してわれわれの路線の単純な押し売りを組織することではない。現実的斗争の階級的↓革命的意義をいかなる水準で把握　　いこ前進せしめるかという問題に他ならない。

四～七月斗争における党派斗争の帰点は七〇年安保と七〇年階級斗争の戦略的目標をめぐる問題である。「日帝打倒」か「日米同盟粉砕」かという区分が自然発生的につくられてきたように、最大限綱領との二重うつしの論議はまさに不可避的であった。「日帝打倒」以外はわれわれの敵である、というようにわれわれは問題をたてたのではなくて、日帝打倒へ斗争の総体を導かなければ斗争の持続的一階級的一革命的発展はない、従っていかにして「日米同盟粉砕論」の斗争をもかゝる発展の上にのせるべきか、というように問題はたてられねばならなかった。

事例をあげよう。[illegible]大ジェット[illegible]に際して[illegible]核派の秋山君は、「ゲバをもってアメ大にとびこむ」と高言した。だがその直後、いやそれと同時平行して中核派内部では分派斗争＝分裂が進行し、秋山発言は民同なみのラッパになった。われわれは仮定の問題を考える習慣はもたないが、もしわれわれが九大にわれわれの部隊を組織していたならば、この問題はさらに鋭く問われたであろう。普遍的にはこの問題は「日米同盟粉砕論」のみによっては即時的一短時間にはともかく、前綱的にはゲバ点もフクメ論ぜ　　秋一も不可能なことを表現したものであったが、にもかゝわらず、「日米同盟粉砕」斗争は方向と路線を見出しえないこと、その方向と路線を見出し　　（7ページ）

右の問題の所在を総括的に確定するために所謂「三派」運動に対するわれわれの　　総括をふまえなければならない。

六六年十二月再建された三派全学連は、日本帝国主義の教育の帝国主義的再編、米帝国主義によるベトナム侵略戦争のエスカレーションと日帝の加担の諸政策に対する階級的高揚期を背景にしたものであった。従ってこの運動は組織的には日本労働運動のなかに同時に自然発生的な高揚をへベトナム反戦）もちつつあった青年労働者の運動と結合し、社共系運動と戦闘的に区別され、かつ当時まだ空洞的集団であった革マル全学連と区別されるところの戦闘的運動として成立した。だが、かかる運動は政治的には国際的階級危機の端初的形成―中ソ分裂と文革運動の発展、帝国主義諸国内における労働者運動、反戦闘争の高揚の形成―の基盤に成立し、その限りで過渡期世界の自然発生性を戦闘的に導くものであった。即ち従来「反スタ」として形成された中核派運動がスターリン主義的指導の外から発生し結合した階級的高揚に反帝主義的にききこまれる全過程をみても明きらかなごとく、戦略的未分化を課題と目標へ政策）において統一するものであった。

階級情勢が七〇年安保へ移行し、戦略的課題が前面に出るにいたってこの運動は媒介とする戦術的一致を喪失した。即ちわれわれの党派的弱点を明大闘争を契機として主流派となった中核派は彼らの綱領的喪失（反帝反スタ）において諸派を包摂する統一戦線を形成しえない弱さを学連主流派という名の中核派運動に収約した戦術をとるに至った。われわれが提起した過渡期世界階級闘争と日帝侵略政策との対決とを結合する路線も一面化され、統一戦線を形成する包括力をかかる党派的対応のまえに喪失したのである。

問題は、しかし次の点で重要である。即ちかかる党派対応主義は基底的には各戦略路線の相違にあることを前提とし、なおかつ党派対応主義を内在的に粉砕した統一戦線として反帝全学連が形成されようとしたのではなく、党派的対応を目的に許容し、そのかぎりでの統一戦線が企図されたことである。統一戦線的全学連は結果としては統一行動組織であるが、その組織論の性格は、「歴史的過程」をもった政治的統一戦線であり、かかる政

治理論、政策を媒介にしえない時点で必然的に腐敗崩壊する。党派全学連はいわば不可避的な過渡形態でしかありえず、その克服は党派主義に阻止されて果されずにいた。

青解派、ML派に対する統一行動のけん引は外在的なものであり、端初的に統一戦線全学連組織への発展口であった。しかし我々の路線の周辺に彼らの行動を結集させ、それを通して政治的統一戦線の豊富化をはかる作業が成熟しないままに党派的対応を許したことは、われわれ自身の「反帝全学連」に対する政治組織的対応が単純な路線貫徹の他派解体論に陥ちいっていたことによる。それはわれわれの路線が単に革命的な危機の総体を正確に予見しえないためというより、将来及び現在の階級的危機を把握し、いかなる意味でそれが革命的危機を構成するかという観点からの政治組織的検討を捨象、ないしは否定することによってもたらされるものである。かつて対革命的左翼のなかであれこれの思想的問題、理論、小党派の政策の諸比較だけが問題であったが、いまではそれに加えて、たとえそれに追従し、しようとしているといえども、その影響されているところの大衆の行動が実際にどのようなものであるか、というまさにそのことが問題になる時代をむかえている。

理論的、思想的問題、政策、行動、かゝる諸問題を大衆、諸階級の動向と結合して理解するだけでなく、これを大衆の歴史的活動と革命との比較において理解し、それに基く諸政策の提起と遂行を企図しうる政治組織的方活動こそ、われわれの当面獲得しなければならないところの党的指ドの一部分であり、統一戦線と政策への政治的能力である。

われわれの戦略が革命的危機の総体をいまだ提示しえないこと、そこにおける規定性の不足等の問題はたしかにわれわれの党建設と階級形成、諸政策の阿級的展開と遅滞させ不十分なものとしている原因であるが、だが一般的な原因なのではなくて、いまだ直接的無媒介的原因である。われわれは党的、政治組織的活動を媒介させ、われわれの戦略を諸階級的運動と革命の真の媒介的原因へと展開せしめねばならない。マルクス主義における革命の方法的条件は思想が現実にせまるだけではなく、現実が思想に迫まらなければならない、ということであっ[illegible]

われはこのかたちにおいて革命的現実をわれわれの戦略にせまらせねばならない。

四、問題の発展のために

われわれの政治組織的活動はその根底においていかなる意志統一を前提とするか。

七回大会において、われわれが、帝国主義の抑圧、侵略に抗し、国際的階級危機を世界革命へ！と提示したのは規定性にえしいとはいえ、ひとつの規準を示していた。即ちまさに明らかにしなければならぬのは、単に危機的情勢＝情勢の危機的性格、にとどまらずかゝる情勢をになう階級の危機的性格であり、これを手がかりとして、われわれは国際的な階級闘争の展開へ介入する政治的基調を導きだそうとしたのであった。

世界同時革命とは、当然原理上の問題でなくて、実践上の問題である。これが実践上の問題であるためには、国際的政治経済情勢の危機的内容を説明するだけでなく、階級危機における世界一一国の政治的な性格を実践的に解明することが必要である。われわれは当面する任務をかゝる視点から設定し、はじめてわれわれの党派性を階級的戦線に拡大することができる。

この意味でまず第一に設定すべき問題は日本労働者、人民の階級的闘争の意味と位置を国際的階級闘争のなかにおいて明らかにすることである。

即ちわれわれの同時革命戦略の一環としての日本階級闘争は、かゝる戦略的問題における内在的問題を全世界的に外化させるものでなければならない。そして国際的階級闘争の諸問題は日本階級闘争に内在化させて進行していることを同時に把握するものでなければならない。レーニンがロシア革命によってはじめてロシアの人民は世界プロレタリアートの前衛となった、とのべたとき、それはプロレタリア国家の成立と革命的経験＝政治的能力の獲得だけでなくこの総体によって全世界プロレタリアートに世界的革命の可能性と現実の提示によって革命闘争の現代的質をあたえたということを意味するものであった。われわれはかゝる点を媒介してはじめて、いわゆる帝国主義の弱い環＝「革命の突破口説」や、政府危機、政治危機説を革命的に領導する体制を築くことができる。

日本階級闘争における革命的指導部は、欧米階級闘争におけるものが革命を内在化させ、内的革命として集約して組織的には左翼反対派に収約されている構造とは根本的に異るものである。まさにかゝる点をふまえた日本の階級闘争に対するわれわれの闘争の基調はより階級的なかたちを国際的にあらわすことによって、世界＝一国的革命の展望をひらくことができる。この問題になった「日米同盟粉砕論」にしても、それが一国的政府危機を自己目的に、してもを待機的に提示しているかぎりかゝる国際主義の立場によってしか粉砕できないものとしてあった。

従って第二の設定すべき問題はいわゆる日帝総路線対闘争についてである。これはまさにかゝる国際的位置における日本の階級闘争の水準から再度提起されねばならない。すなわち日帝総路線対決＝中央闘争、という諸現象と意識性からくる前衛的闘争の形態において理解するにとどまらず、国際的反革命に対する階級闘争の一環としての意識性の諸基準から理解し、この闘争の階級的深化と拡大をはからねばならない。

このことは第三にわれわれの反帝統一戦線の諸政策、戦術として具体化されるべき諸問題を提起している。この統一戦術の性格及び展望については あらためて総論づけて提起することにしなければならない（現在PBで討議中）

第四にかゝる諸政策を具体化するところのわれわれの体制問題である。

全学連大会指ドにおいてもこの問題はわれわれを困難にした直接的な、しかし相造的に形成された原因であった。われわれはこの問題を単なる組織操作に終らせることもなく、あらたな体制を確立し、そのもとでの活動を展開しうるように、PBの執行体制を強化等を通じて諸配置を実現し、体制再編の作業を推進しつつある。

われわれは以上の四点をさらにこの間の諸闘争を通じて討議し、問題の発展強化をかちとってゆく方針であり、以上を第一次とし、第二次的総括として この点の展開につとめる方針である。なおこの文章は「戦線」別冊号巻頭文章とあわせて検討されることを希望する。

そして各地区における討議を基礎として、[illegible]は八月末、中央委員会を開催し、基本綱領[illegible]去[illegible]の上にたって、秋の方針を確定し、綱領的結集をかちとらねばならないと考える。

以上